****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 154 号
−環境・農業・食べ物など情報の交流誌−
2005.03.10（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
＜キーワード＞
環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所＆『電子耕』編集同人が編集・発行。
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm
**********発行部数　1424　部**********

□　目　次　　□----------

＜今週の提言＞田植機の普及と水質保全　田渕俊雄
＜旬を食べる―野良からの便り・19＞“切干大根”　小泉浩郎
＜読者の声＞丹羽さんから：西武報道に思う
＜高齢者の健康情報＞　106 歳の気力・筋力トレーニング　原田　勉
＜山崎農業研究所情報＞
◇第 116 回定例研究会―耕地としての土と作物―速報（その１）
１．生ゴミ堆肥の特性と施用効果
――日本土壌協会　古畑　哲氏
＜79 歳の意見＞　農政改革にあたって戦後 60 年を省みる。（２）　原田　勉
＜日本たまご事情＞
その日のタマゴを食べると金運に恵まれる　その２　齋藤富士雄
＜ミニ解説＞農業・農村の組織とその役割（５）―農業委員会―　石川秀勇
＜編集後記・同人の近況報告＞　２月 24 日ー３月９日

＜今週の提言＞田植機の普及と水質保全

田植機で短い苗を植えるようになってから、水深を浅くするために田植えの前に排水するようになった。そうすると、施肥後の水に溶けた肥料が流出してしまう。これは肥料の無駄使いになるだけでなく、水質汚濁の原因になる。それで土中に施肥する施肥田植機やすぐには溶けない肥料の開発が行なわれた。

さらには、田植えの前には「シロカキ」という作業が行なうが、これも水質保全や省力の面から問題になっている。シロカキは水田表面に水をためて土を耕うん撹拌することで、田の表土を柔らかく平らにし、田植えができるようにするため、昔から行なわれてきた。シロカキには漏水を防ぐ効果もある。かな

りの重労働なので、しないで済まないかといわれていたが、田植えのためには必要な作業とされていた。

ところが今、シロカキの際に発生する濁水の流出が湖などの汚濁になるので問題になっている。琵琶湖では条例をつくってシロカキ濁水や農薬・肥料の流出防止に取り組んでいる。それでシロカキをしない「無シロカキ栽培」が試験されている。田植機が無い時代には考えられないことであるが、少しぐらい土が堅くても田植機を使うので大丈夫だろうか。

さらにいっさいの耕うんを行なわない「不耕起栽培」も普及し始めている。こちらでは溝きり機がついた特別の田植機が使われており、土が堅くても大丈夫である。不耕起栽培は無農薬や冬期湛水と結びついて、省力化だけでなく生態系保全にもなる。

このように田植機の普及発展がいろいろな面に影響している。環境保全や生態系保全との関連をみながら水田農作業のひとつひとつを見直す必要がありそうである。

山崎農研会員・元東京大学
y.nouken@taiyo-c.co.jp

＜旬を食べる―野良からの便り・19＞“切干大根”

切干大根は、秋収穫した大根を仮貯蔵し、寒のお日様の手助けを待って作られた。陽だまりに洗われた白い大根が並ぶ。手拭を姉さん被りした祖母が、背を丸くし黙々と手を動かす。切りたての白い瑞々しい大根と節くれだった大きな手が印象に残っている。干し大根には、千切、銀杏切、短冊切およびかんぴょう状のきり方がある。千切が一般的で多くの料理に使われる。

水戸納豆の本場、ここでは銀杏切の干し大根が必要だ。手作り納豆に銀杏切干し大根を混ぜたものを「しょ」ぼろ納豆」として愛好している。多少塩を加えた保存食である。納豆ほどべたつかず、大根の甘さと納豆の旨み、独特の香りを醸しだし歯ざわりも楽しめる。朝食、暖かいご飯に載せて口の中にかき込めば平和そのもの。

冬は野菜類が少ない。スーパーに並ぶ青物は、ハウス育ちの季節はずれ。この時、太陽の光を一杯に受けた切干大根は、煮物に、酢の物に、みそ汁にと広い用途に大活躍である。太陽のおかげで生大根に比べると、カルシウム 15 倍、鉄分 32 倍、ビタミンＢ１・Ｂ２は 10 倍になり、植物繊維もたっぷり、低カロリーの健康食である。しかも安くて保存がきき料理が簡単、是非この旬を楽しみたい。

昨年、中国・雲南を旅した。ベトナムに近い海遠市近郊、見渡す限り切干大根の干し場があった。品種は青首大根、日本への輸出用だという。日本のスーパーでまだ中国産を目にしたことがないが、どこでどうなっているのだろうか。

小泉　浩郎
山崎農業研究所事務局長
y.nouken@taiyo-c.co.jp

＜読者の声＞

=-

●03/07 丹羽敏明さんから：西武報道に思う

西武鉄道の有価証券報告書虚偽記載問題が連日新聞やテレビで報道されている。私はこれに関連する今は亡き一人の知人のことを思っている。その人はかつて国土計画（現在のコクド)の常任監査役だった。

私がその人（H氏）と知り合ったのは、終戦直後のシンガポール捕虜収容所内であった。H氏は収容所の経理責任者で主計大尉であり、機関誌紙の短歌欄の選者（H氏は短歌を北原白秋に師事）でもあった。当時私は収容所の演芸中隊の庶務担当で、演芸公演が終わったあと、H氏が「丹羽君、炊事に小夜食を用意させておいたから取りにおいで」と言って、乾パンを砂糖でまぶしたものや、揚げたものなどを支給してくれた。演芸のよき理解者であり最強の支援者であった。

復員してからは演芸中隊の戦友会の監事をお願いし、戦友会の行事である旅行の宿舎にプリンス系のホテルを世話していただいたり、私の勤め先の会館居住者の懇親ボーリング大会の会場（品川ボーリング場）を斡旋してもらったり、

運動会場に豊島園を紹介してもらったりしてお世話になった。またプリンスホテルの招待券を送ってくださり、夫婦して利用したこともある。御自宅は、国土計画の監査役の住まいとは到底思えない質素な家であった。

復員５０年目の平成７年に、捕虜収容所時代の機関誌紙に掲載された短歌を集めて冊子にしたものの復刻版を出版する計画をたてられ、私がお手伝いをさせて頂いたが、原稿が出来て間もなく８９歳で亡くなられた。その御遺志を継いで私は『虜囚のうた』と題して自費出版した。

Ｈ氏は戦後の若者の無軌道ぶりに悲憤慷慨する文章を戦友会の機関誌に寄稿するなど憂国の士であり、人格高潔の人であった。御存命ならば西武の問題でいろいろ御苦労させられるお立場であったと思い、亡くなられてよかったと申し上げたら、Ｈ氏に叱られるかも知れないが、私はそう思っている。

＜高齢者の健康情報＞　106 歳の気力・筋力トレーニング

近藤康男先生は、2005 年 1 月 1 日、満 106 歳になられた。農学者としては最高齢の記録更新である。

実は昨年 10 月に自室のベッドから落ちて、腰痛になり、一時寝たきりになったが、マッサージと筋力トレーニングで回復された。

しかし、再び 12 月末に室内で転倒して救急病院に入院された。その後リハビリ専門病院に移られて、医師と療法士による筋力トレーニングや歩行訓練で、現在は歩けるようになり、2 月末に退院された。

リハビリ病院にお見舞いしたとき、106 歳の健康の秘けつを尋ねると、「若いときに歩いて通学したおかげだよ。」とのことだった。
同行した教え子にも、「車は使わないように、歩け歩け」を強調されていた。

104 歳の夏から視力を失われて、寝たきりになったり、肺に水がたまったりと、何度かピンチがあったが、ご家族の手厚い介護と、医師・療法士の指導によって今回も退院までこぎつけられた。

近藤先生の老後の生き方は、第一によく歩くこと。農文協図書館に通勤する時も、よく歩いておられた。次に、よく食べ、よく寝ることだ。自宅静養になってからでも三度の食事には、必ず起きて日本の伝統食を食べておられた。

そして、自分のことは自分でするという自立の精神・気力があること。人間は 106 歳の高齢になっても、自らの気力で脳の機能は活動し、筋力トレーニングによって体力も維持できるという証明である。

人間の寿命は誰にも予知できないが、まだまだ長生きして、後輩に元気を与えていただきたいものである。

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人
原田　勉
http://nazuna.com/tom/

＜山崎農業研究所情報＞

◇第 116 回定例研究会―耕地としての土と作物―速報（その１）
　2005 年３月５日　太陽コンサルタンツ会議室　20 名参加

〔講演要旨〕
１．生ゴミ堆肥の特性と施用効果
――日本土壌協会　古畑　哲氏

生ゴミはタンパク質、アミノ酸が多く、塩分、脂肪も多いという点で他の堆肥の資材と異なる。この生ゴミは今までは埋立処分がされてきた。しかし現在は処理の限界となっている。そこでこれを肥料として利用する方向が取られている。食品リサイクル法が成立して廃棄物の排出抑制が厳しくなって、年間排出量 100 トン以上のメーカーはこの法の規制を受ける。しかしまだ、実行の比率は低い。例えば生産過程で発生する事業系産業廃棄物 940 万トンのうち再生利用（肥料化、飼料化、その他利用）されているのは 163 万トン（17.3%）にすぎない。

堆肥化処理には一般に発酵過程が必要であり、装置そのものよりも労力に経

費がかかる。 堆肥化には発酵方式として攪拌タイプ（pH8.2)、堆積タイプ（pH5.3)、減容タイプ（pH5.4）がある。これとはべつに生ゴミ処理機による物理的な乾燥型がある。

以上の各方式での実験の結果、pH と粗脂肪との関係ではアルカリ側で発酵も速く、粗脂肪%は低下し三要素バランスのよい堆肥がえられた。堆肥成分組成については製造方式によって異なり、攪拌タイプでは pH が弱アルカリ性で三要素のバランスがほぼ保たれ、粗脂肪も低かった。堆積タイプでは pH が弱酸性で、ややバランスが悪く、粗脂肪もやや高かった。しかし乾燥型は水分低く、pH が弱酸性であり、バランスが悪く粗脂肪も高かった。

発芽率をコマツナを使って比較した。アルカリ側で発芽率が高く（＞85%）たいへん良い結果となった。発酵過程における物質の推移を見ると、堆肥化物の pH が７以上で粗脂肪が低くなるほど、コマツナ発芽は良好であり、堆肥化物の熟度が十分と見なされた。好気的な発酵過程では粗脂肪や乳酸、酢酸の分解が速やかに進行した。嫌気的な発酵過程では、pH が酸性を呈する期間が長く、粗脂肪や乳酸、酢酸の分解が緩慢であった。

生ゴミ堆肥の腐熟度判定については、コマツナの発芽が基本である。二酸化炭素の累積発生は直接的ではあるが、手間、時間がかかりすぎる。手軽には pH の測定が有力な測定方法である。熟水可溶炭素、粗脂肪、蛋白態窒素の測定も腐熟度判定の補助になりうる。

現在、食品リサイクル堆肥の品質基準（全国食品リサイクル協会）では水分60%以下、pH6.5〜9、塩分は乾物当たり５%以下（１t/10a 以下の場合)、油分は乾物当たり５%以下（同←)。重金属については肥料取締法に従っている。

有機質資材の窒素無機化・有機化特性を知るために円筒に種々の肥料を入れて各成分の経時的な推移を測定した。その結果作物への施用効果として窒素施用量の２分の１づつを化学肥料と有機質資材（下水汚泥コンポ、生ゴミ堆肥）から供給した場合には、有機質資材施用の各区において作物収量は化学肥料（単肥）区に比べ、春作では増収し、秋作では減収した。可食部の品質に関しては、生ゴミ堆肥の各区では化学肥料区に比べて一般に糖分、ビタミンＣなどの含有が高い傾向が認められた。この春作と秋作の相違は気候の差による土壌微生物の活動と関係あるものと判断した。（文責：安富六郎・石川秀勇）

＜79 歳の意見＞　農政改革にあたって戦後 60 年を省みる。（２）

153 号
http://macky.nifty.com/cgi-bin/bndisp.cgi?M-ID=1283&FN=20050224135350
よりつづく。

◆２、農業近代化批判から生まれた新しい動き
　　地域づくりで意欲的取り組み

４）　農業の近代化、規模拡大が進んで 10 年も経たないうちに、減反政策が始まった。

1960 年代、稲作の減反、野菜産地では土の悪化、連作障害が深刻になり、農業中毒による農家の健康破壊など、経営面でも身体面でも、農業近代化の矛盾が明らかになっていった。

1969 年、昭和 44 年、10 月号から、「現代農業」は読者の多様な欲求に応えて、本文・グラビアページを倍増し、カラー口絵を設け、生活・農政ページを大幅に拡大した。農業技術・経営誌から家族の誰もが読める総合雑誌へと変わったのである。

1970 年、昭和 45 年から、主張欄を設け、「近代化路線に惑わされるな」と、農政批判を展開し、農家の自給を重視し、栽培技術面でも、化学肥料や農薬などに依存する農業からの脱却を目指す農家の実践を多様に取り上げるようになった。

近代化批判は、農薬、肥料、品種、機械などの資材の見直しへと進んでゆく、農文協の主張を取り入れた、有吉佐和子の『複合汚染』がベストセラーになり、社会問題となった。

1980 年代の前半から、減農薬、土肥料、品種選びの特集号が始まり、今日まで続き、ますます農家の実践例が増えてきている。

一方、自給の見直しは、その後 50 万円自給運動など、女性たちの暮らしと農家経営を守る運動へと発展し、これらを土台に、朝市・産直

が各地で始まり、だれも予想しなかったほどの広がりを見せている。

こうして「現代農業」は、「農業技術の実用誌」「暮らしの実用誌」「販売・経営の実用誌」「地域づくりの実用誌」という四つの顔を持つ総合雑誌になった。

5）変わらないこと、新しい農家の取り組み

戦後 60 年の間に、日本農業は大きく変わった。「現代農業」も変わった。しかし農家の考えや生き方は変わらない。

農家は、稲やトマトや牛を育てる中で、対話しながら学び、育てている。その農耕労働の本質は少しも変わらない。

自給の作物や野菜をお裾分けするという、農産物の届け方は地産地産という形で引き継がれ、大きな動きになっている。

農家の土地や村への思いも変わっていない。自給農家や兼業農家まで含めて、むらを守ろうという動きが、大規模農家を巻き込んで、集落営農となっている。

農家が大切にしてきた、作物と対話する楽しさやむらうちの助け合いを農家は「現代農業」の編集者や普及者に語り伝えている。

これが雑誌の読者の幅を広げ、今では新規就農者や、小学校の先生、地域の託老所にも読まれている。これが「現代農業」の読者 15 万人の実態である。

今年は、新たな「食料・農業・農村基本計画」の策定（農政改革）が予定されているが、政策当局者も、農業問題評論家も、以上のような、今までにない農家の意欲的な取り組みの現実に、注目してもらいたいと思う。

（以上）

＜参考リンク＞

(社)農山漁村文化協会「現代農業」
http://www.ruralnet.or.jp/gn/
（ちなみに、「主張」は、1995 年１月号掲載分から最新号まで、
http://www.ruralnet.or.jp/syutyo/
で、発行年月日をクリックすれば全文読める。）

農文協図書館「農文協の雑誌『現代農業』の変遷」
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/nbk/gn1.html

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人
原田　勉
http://nazuna.com/tom/

＜日本たまご事情＞　その日のタマゴを食べると金運に恵まれる　その２

１月 20 日のタマゴを食べると金運に恵まれると風水の先生がＴＶで言ったとかで、私どものタマゴ直売所がその日急に忙しくなった話をしたら早速メールをもらった。旧友カバさんは若い時から良く俳句をたしなむ。いわく。

『一月二十日は、大寒の入りであった事。そして、「寒卵」と言うのは、古くから寒さを凌ぐ食材として珍重され、冬の季語にもなっている事。そこで、この季語を使った俳句を調べてみると、差し当って 14 句ほど見つかった。古いのは 1700 年代半ばの炭　太祇（たん　たいぎ）による

苞(ツト)にする十の命の寒鶏卵

寒鶏卵（かんたまご）の１０個程を藁苞に包みこむ様子を思い浮かべる。
10 個ほどの卵を藁苞に包むのだが、これは、鶏の命の卵であり、私にとっても大切なたまごであることよ。と、解すれば良いかと思う。この作者は敢えて、「寒鶏卵」と鶏の卵であることを強調して、鶏の命を貰っていることを言ってると思うのですが』

素晴らしい解釈であると思う、日本人は昔から「寒卵」を冬の季語としてきたのだ。

今はそうではないが、たかだか60年前寒中にタマゴを生産することは難しく、したがって値段も高く貴重品であった。まして江戸時代は尚更であったろう、時代が違うとはいえ同じ「寒卵」を見て「金運に恵まれる」と発想する今の日本人を、直売所のタマゴが少し売れたからといって喜んでばかりいられない。

齋藤　富士雄
（株）愛鶏園
http://www.ikn.co.jp/

＜ミニ解説＞農業・農村の組織とその役割（５）―農業委員会―

農業委員会は、田畑など農地のある市町村であれば、農村地域の市町村に限らず役場に設置されている組織です。

この設置は、昭和26年制定（この時期、農村の民主化等が課題となっていたとされます）の農業委員会法に基づいています。そして、教育委員会と同じく行政委員会といわれる性格を有し、役割は農地制度の関係を主体にしております。

農業委員会の委員は、農業者の代表として選挙により選出された委員（10ー40名）と、少数の農協など農業団体の役員、或は市町村議会の推薦する学識経験者の委員とで構成されています。会長は委員の互選で選出され、委員の任期は３年とされています。

では、具体的に何をされているかというと、
(1) 農地の売買・貸し借りの許可（農地法）
(2) 農地の転用の許可（農地法）
(3) 農地利用の増進、担い手育成等の推進（農業経営基盤強化促進法）
等の関係を、特に重要な業務として取り組まれています。

また、付帯して地域における「標準小作料」や「農作業標準賃金」、あるいは「農業者年金」などの関係も、農業委員会が所掌されています。

農業委員会の下には事務局がおかれ、農地主事等の市町村の職員がその業務活動を支えています。そして、農家ごとの農地利用関係等を整理した「農地基

本台帳」を整備し、その異動の把握に努めています。

　農業への新規参入などに当たっては、農地利用が不可欠になりましょう。その際には、上記のような農業委員会の役目とする農地行政に関わってきます。役場の農業委員会事務局の窓口を訪ねるなどされ、資料を得たり情報をもらって進められれば、と思われます。

石川　秀勇
山崎農研会員、野田市在住
y.nouken@taiyo-c.co.jp

＜農文協図書館情報＞（2005/2/28 更新）

◆2005.1.1-1.31 登録の新規収蔵図書
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/01new.html

◆ニュース１：蛍光管反射板を導入し閲覧室が明るくなりました。
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/2005/02/news1.html
住友３M 社製蛍光管反射板を設置したことにより、閲覧室机上照度が約６割明るくなりました。
http://www.mmm.co.jp/cmd/ecp/newlux/

◆ニュース２：一部個人文庫を別館５階書庫に移設しました（その２）
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/2005/02/news2.html
本館閉架書架整理のため、岩崎文雄文庫・菱沼達也文庫を別館５階書庫に移設しました。
　一部時間帯には別館５階書庫に入室できない場合があります。
入室ご希望の方は、あらかじめご予約をお薦めします。

◆篠原泰三文庫を収蔵し目録を公開しました。
　篠原泰三文庫紹介
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/07-021shinoharabunko1.html
　主な著作，翻訳
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/07-021shinoharabunko2.html

篠原教授の業績を顧みる　（逸見　謙三）
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/07-021shinoharabunko3.html
目録・全６頁　（462 件）　別館５階書庫Ｃ列
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/list/07-021shinohara/01.html
（館内閲覧・コピー・FAX サービスのみ可能です）

農文協図書館　　IT 担当　原田太郎
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/

＜編集後記・同人の近況報告＞２月 10 日ー２月 23 日　２月 24 日ー３月９日

先日、宇根豊さんが専務理事をつとめられるＮＰＯ法人・農と自然の研究所主催の「田んぼの学校」に参加した。講師は環境倫理学の鬼頭秀一さん。欧米の環境倫理学を批判的に吸収しながら，独自の理論構築をすすめてきた。そのキーワードのひとつが「かかわり」である。

里山の荒廃が問題になっているが、かつては山の管理、堆肥や薪炭としての利用、農業生産、生産物の分配、あそびなどが一体のものとして地域で営まれていた。そのような「かかわり」が高度成長期以降、分断され、里山の荒廃に結びついた。持続可能な社会のありようが模索されるなか、あたらしいスタイルでの「かかわり」方の創造が求められているという。

白神山地の保護問題に真正面から取り組んだ、名著『自然保護を問いなおす―環境倫理とネットワーク』（ちくま新書）が刊行されて９年になる。鬼頭さんは、この間の環境意識のたかまりやさまざまな実践を思うと、10 年後はどんな社会になっているかたのしみです、と話されていた。倫理学者などというとしかめっらをしたペシミストという印象がなくはないが、鬼頭さんはフィールドに鍛えられた熱血漢であるとみた。（山崎農業研究所会員・田口　均）

◎お願い「＜読者の声＞の投稿規定・メールの書き方」

１、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
２、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
３、１回１テーマ、10 行位に。
４、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

５、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。
http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html
インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、
y.noken@taiyo-c.co.jp
となっております。投稿される方はこちらのアドレスにお願いします。

次回　155 号の締め切りは３月 19 日、発行は３月 24 日の予定です。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』
著者：原田　勉　定価：735 円　発行日：2002 年 10 月 4 日
発行所：岩波書店　ISBN4-00-700045-X
まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら
http://nazuna.com/tom/book.html

『電子耕』から大切なお知らせ
http://nazuna.com/tom/denshico.html
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html
＜本誌記事の無断転載を禁じます＞

****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 154 号
バックナンバー・購読申し込み／解除案内
http://nazuna.com/tom/denshico.html
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html
2005.03.10（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp
**********ここまで『電子耕』**********